はぐくむ

No.32（平成28年）

社会福祉法人 鶴風会
東京小児療育病院・みどり愛育園
西多摩療育支援センター
後　援　会

－ 連 絡 先 －
〒208-0011
東京都武蔵村山市学園4-10-1
電話042-561-2521（代表）
東京小児療育病院
Eメール tcrh@kakufuh.com

理　念

私達は
障害児者の生命 機能の維持
向上と生活援助のため誠実に
積極的に取り組み障害児者と
その家族を支援します

1頁　五島ライブラリーと桑原ホール
2頁　後援会長就任のご挨拶
3頁　平成二十八年度にあたって
4頁　新年度に向けて　「ねむの木賞」受賞報告
　　関東甲信越静肢体不自由児施設長・事務長会議の報告
5頁　日本重症心身障害福祉協会東日本施設協議会報告
　　第四十一回日本重症心身障害学会学術集会を主催して
6頁　東邦大学看護学部散策 －五島瑳智子先生の教え－
7頁　オルフェの会　チャリティーバザー
8頁　後援会だより
　　ご寄付者名簿

五島ライブラリーと桑原ホール

鶴風会　理事長　中　里　厚

武蔵村山市の野山北公園で自生するカタクリの花

寒暖差の激しかった季節が過ぎ、ようやく春の温かさが増して参りました。

現在東京小児療育病院では病棟の大改修工事が行われております。利用者の皆様方には大変ご迷惑をおかけ致しております。

昨年八月に前鶴風会後援会長の五島瑳智子先生がお亡くなりになりましたので、新後援会長に青木継稔先生がご就任になりました。

青木先生は東邦大学の小児科教授（小児神経学の権威）で同大学の学長も歴任され、この間社会福祉法人鶴風会の評議員として、いつも本施設の運営のためにご協力して頂いております。今後とも障害児医療のため後援会の会長として宜しくお願い申し上げます。

鶴風会の施設は国や都の施設では有りませんので、後援会の皆様方のご支援がないと本施設の事業の継続は望めません。どうか皆様方の継続的なご支援をよろしくお願い申し上げます。

歴代の後援会会長は、近藤龍一、桑原章吾、本明登志子、五島瑳智子先生、現在の父母の会後援会会長は竹中廣夫氏、父母の会会長は今井久吾氏がお勤めになり、多大かつ献身的なご支援を頂いております。

皆様方からご寄付頂きました後援会の資金は、病院の直接の運営資金には組み入れず、看護宿舎や保育室の改修、職員の海外研修（北欧福祉施設）、桑原ホールの建設など内容をよく検討して有効に使用しております。

亡くなられた五島前後援会長は細菌学の権威であったばかりでなく、美術、音楽、演劇などあらゆる分野に造詣が深い先生でした。

先生が生前コレクトしていた美術や文学全集、CDなどを沢山病院に寄付して頂きました。病院の桑原ホールは図書室もかねて可動書架も整備されていますので、先生のコレクションをコーナーにまとめて五島コーナーを作りたいと思います。また絵画も十五点ほど頂きました。名画の鑑定書付きのレプリカで桑原ホールや新しくなった病棟に飾る予定です。絵画と言えば今年は日伊国交樹立150年記念事業として、国立西洋美術館で「カラヴァッジオ展」が開催されています。

ミケランジェロ・カラヴァッジオはイタリアを代表する写実派の画家で多くの名作があります。

しかしその精密な画風とは裏腹に性格が粗暴で、殺人事件まで起こしその逃亡中に今回の展覧会のメインとなる「法悦のマグダラのマリア」を描きました。

この作品には贋作も多く、今回本物と鑑定された絵画が世界で初めて、日本で初公開されました。

マグダラのマリアはキリストを裏切りのちに後悔し、キリストはこれを許しますが、この作品は宗教画らしくない作品です。

他に「懺悔するマグダラのマリア」「聖マタイとマグダラのマリア」の作品があります。

宗教画といえばギリシャ正教会に飾ってある聖人達の肖像画であるイコン画があります。

日本でイコン画をはじめて描いたのは、ペテルスブルグの修道院で修行した女流画家の「山下りん」です。

私の祖父の田舎は福島県の白河市ですが、市内には一九一五年（大正十四年）に建てられたビザンチン様式の「白河ハリストス正教会」があります。教会の中には山下りんの作品が残されており、司馬遼太郎の「街道を行く」にも紹介されています。

先日我が家のPCをウインドウズ7から10に切り替えましたが、もとよりPC音痴の私に出来るわけがなく、知人の超ベテランの専門家に対応してもらいました。PCの表紙になるアイコンが出たので「このアイコンの語源を知っていますか？」と聞きました。「いやわかりません」という返事でした。

そこですかさず「アイコンの語源はイコン画からきてるんですよ」と教えてあげました。

いつもPCでは劣等生で悩まされ続けている私ですが、この時ばかりはPC全てに精通しているようないい気分になりました。

社会福祉法人鶴風会 後援会長就任のご挨拶

青木継稔
（東邦大学名誉学長）

皆様こんにちわ。青木継稔（あおきつぐとし）と申します。私の友人たちは、〝けいねん〟とか〝けいねんくん〟とか呼んでくれています。

さて、この度は縁あって社会福祉法人鶴風会後援会長にご推挙いただき身の引き締まる思いです。と申しますのは、前後援会長が本法人前理事長であり東邦医療短期大学名誉学長の故五島瑳智子先生であり、前々後援会長が東邦大学名誉理事長・名誉教授の故桑原章吾先生でありましたので、その責任の重さと十分に役職を全うできるかと大きな不安を抱いています。とくに、故五島瑳智子先生のエネルギッシュな活動、人を魅了するそのお言葉の素晴しさ、責任ある行動力などとても真似は不可能です。したがいまして、私なりの考え方や活動にて務めさせて頂く以外にありません。幸いにも現本法人理事長や理事・評議員の方々、院長先生はじめ多くの医師、職員の方々とも知り合いが多いので大変に助かります。

中里厚理事長は、医師としての実力、人格、実行力・決断力に優れておられる方であり親しみ易く、色々とご相談できますので安心しております。また、学校法人東邦大学の炭山嘉伸理事長も強力なご支援をして頂けるとのことにて頼もしい限りです。

当法人鶴風会は昨年、50周年を迎えて、今年は五十二年です。東京小児療育病院、みどり愛育園および西多摩療育支援センターを有し、発展して参りました、重症心身障害児施設であり、発達障害他の障害児（者）支援施設でもあり、大きな社会貢献をしてきています。

誰も障害児を生むことを望まないと思いますが、自分の子として重症心身障害や発達障害などの障害児が生まれてしまうことは稀ではありません。誰のせいでもなく、自分の家庭に重症心身障害児や発達障害児などの障害児を抱えてしまったご家族の皆様等のお気持は察して余りあるものがあると思います。肢体不自由児は、リハビリテーションにより、大きな成長や改善が可能ですし、発達障害児であっても医療・療育・教育等によってかなり改善が期待できるようになりました。ご本人の努力、ご家族の暖かい支援は勿論のこと、周囲の人々、地域社会、国家などの支援が極めて大切です。日本人や日本の社会は、これら障害児（者）への支援や福祉関係に冷たい状況です。西欧先進国の地域住民・社会あるいは国家レベルの支援体制は素晴しいものがあります。周囲の人々の障害児（者）への暖かな気持の発露や声かけだけでも、本人やご家族にとって嬉しいものと思います。障害児（者）ひとりひとりの命は輝いていて、それぞれ人格を有しているのです。私の願いの一つは、地域社会における住民と障害者との壁を失くすことであり、また、経済的な支援も大切なひとつと考えています。社会福祉法人の全国多くの施設が赤字経営となるような国の予算、都道府県市町村の考え方は断じて許すことはできません。日本の社会、地域、住民の成熟を心より願っている一人です。

どうか、本法人後援会を通して、絶ゆまぬ暖かなご支援ご協力をお願い申し上げます。また、十二月第一日曜日のチャリティ・オルフェの会やバザー等におきましてもご支援・ご協力のほど宜しくお願い申し上げて、後援会長就任のご挨拶とさせて頂きます。

平成二十八年度にあたって

東京小児療育病院
院長　椎木俊秀

一昨年度の東京小児療育病院五十周年・西多摩療育支援センター十周年記念事業に続き、昨年度も大きな行事や事業が続きました。九月十八、十九日に私が会長として第四十一回日本重症心身障害学会学術集会を千名以上の参加で開催しました。

十月には一階病棟の大規模改修工事が始まりました。まず東一病棟を半年かけて改修し、その後、西一病棟を同じく半年かけて改修する予定です。新年度を迎える頃には東一病棟の工事が終了する予定です。改修の目的は施設の老朽化もありますが、生活環境の改善と年ごとに利用者の方の重症度が上がっているので酸素や吸引の配管のない部屋を改修してどの部屋でも医療処置ができるようにすることです。

昨年度一つ残念だったのは当法人の設立当初から法人運営に尽力され、常務理事、理事長そして最後は後援会長として我々を支え続けていただいた五島瑳智子先生が平成二十七年八月十三日に八十七歳で亡くなられたことです。大きな支えを失った喪失感はありますが、先生の思いを引き継いで頑張っていきたいと思います。先生が長年やって来られたオルフェの会も例年通り開催でき、今後も継続することが確認されました。

今年度は四月から半年かけて西一病棟の改修が始まる予定です。利用者や家族の方々にはもうしばらくご迷惑をおかけしますが、ご協力お願いします。当院は全国で最も多く重症児者の短期入所を受け入れています。経営的に不利で医療安全上もリスクが非常に高い中、在宅の重症児者支援のため奮闘してきました。その努力の甲斐あって四月から都の短期入所事業支援費が大幅に増える予定です。さらに四月からの診療報酬の改定で短期入所中の医療行為の一部が保険診療上認められることになりました。こちらも相当の増収になることが予想されます。全国的には経営環境は厳しくなってきていますし、当院にとっても事情は同じですが、先進的な取り組みを行っていれば、いつかは認めてもらえることもあるということは大きな励みになります。今年度中に電子カルテ導入に向けての準備も始める予定です。

医師、看護師不足をはじめ職員確保が難しくなってきていますが、利用者の方々への支援を強化していくためには①職場環境の改善を図るとともに、職員が意欲的、自発的に働ける人材育成を進める、②業務の質を落とすことなく効率化を進めるなどの課題に取り組んで行かなくてはなりません。

非常に厳しい状況は続きますが、そういう時期は問題点が明確になると同時に、その解決に真剣に取り組まざるを得ないという意味で、大きな飛躍の可能性も秘めています。障害児者の方々の健康で幸せな生活の実現というわれわれの目的地を目指して、たとえどんな状況であろうと「雨の日には雨の中を、風の日には風の中を」という気持ちで、一歩一歩あゆみ続けたいと思っています。

新年度に向けて

西多摩療育支援センター　センター長　鶴岡　広

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。お蔭様で大きな事故もなく、利用者さん共々良い年を迎えることが出来ました。さて、今年の干支は申です。申年の申は本来「しん」と読み、「のびる」や「もうす」という意味があるそうです。未来を見越し、更なる発展に向け、希望に満ちた穏やかな一年となることを願っております。

平成二十八年度は医療報酬の改定が行われ、引下げが見込まれます。そう言う中にあって、住み慣れた地域で住み続けるために、在宅の中重度者や障がい児者への対応の更なる強化に向けた在宅医療・療育や介護連携の推進への取組みが求められています。

また、地域支援システムに不可欠な社会資源であると共に、将来的なマンパワー減少を見据えた質の高い介護人材の確保及び効率的且つ効果的な配置によるサービス評価の適正化と効率的なサービス提供体制を構築し、保険料と公費で支えられている障害福祉制度の持続可能性を高め、限りある資源の有効活用に取組むことが重要であります。

そのためには、社会福祉法人の役割としてセーフティネット、地域貢献の観点からも地域における公益的活動の推進、法人組織のガバナンス強化や透明性の確保、規模拡大・協働化等への具体的な対応が必要であることから、基本理念である「すべては障がい児者とご家族のために」を旨として、出来ることから確実に実践していくことが経営基盤の安定化に資するものと考えております。

西多摩療育支援センターのあらゆる職場機能を駆使し、職員一同が使命感と責任感を持って、誠心誠意取り組んで参りますので、尚一層のご指導、ご鞭撻をお願いいたしますと共に、皆様方の益々のご健勝とご発展をご祈念申し上げ、新年度のご挨拶と致します。

「ねむの木賞」受賞報告

看護科長　八代博子

この度、「ねむの木賞」を受賞させていただきましたので報告いたします。

ねむの木賞は「ねむの木の子守歌」の歌詞著作権を肢体不自由児事業振興のために下賜された皇后陛下の御意志を永く記念するため、昭和四十二年に設けられたもので、医療型障害児入所施設、療養介護事業所、特別支援学校等において永年勤務し、障害児・者の日常生活指導などに携わった方に対してその労をねぎらい、また、今後の益々の活躍を期待して毎年授与しているものです。

第四十九回（平成二十七年度）「ねむの木賞」の贈呈式は、平成二十七年十一月九日に東京品川のグランドプリンスホテル高輪において、日本肢体不自由児協会総裁常陸宮殿下並びに同妃殿下のご臨席のもとに行われました。今年度も全国の関係施設、学校等からの推薦を受けて四名が受賞しました。

贈呈式前には、常陸宮同妃両殿下と受賞者の懇談の時間がもたれました。両殿下は受賞者の日頃の業務に関して興味深くお聞きになられ、受賞者も積極的にそれぞれの施設での障害児・者の日常生活の状況や仕事ぶりを説明し、思い出に残る貴重な時間を過ごすことができました。

昼食会終了後は、ねむの木賞を受賞した四名と、日本肢体不自由児協会の田中健次理事長とともに皇居・御所に参殿し、皇后陛下のご接見を賜ることができました。会長をはじめ各受賞者よりご接見の栄の御礼の言葉を言上し、皇后陛下からは各受賞者への労い並びに励ましのお言葉を賜る栄にあずかりました。受賞者にとっては一生の思い出となりました。

この栄えある賞に推薦して頂けたことに感謝するとともに、受賞したことに責任を感じ身の引き締まる思いです。受賞したことに恥じぬよう、今後は今まで以上に障害児・者の支援のために尽力する覚悟です。どうか今まで同様、ご指導ご鞭撻をお願いいたします。

贈呈式のようす

関東甲信越静肢体不自由児施設長・事務長会議の報告

経理課長　乙幡　和明

平成二十七年十一月十二日（木）～十三日（金）の二日間の日程で、茨城県愛正会記念茨城福祉医療センターの主催により、茨城県水戸市水戸京成ホテルにて開催されました。

この会議は、全国肢体不自由児施設運営協議会の加入施設による、関東・甲信越・静岡ブロックの施設長・事務長が一同に会して毎年開催される会議です。当施設からは、椎木院長、佐藤事務局長、西藤副院長と私で参加いたしました。

開催初日の午前十時からは民立民営部会が開催された。民立民営の施設、九施設の施設長・事務長が一同に会し、意見交換を行ないました。

担当施設の茨城医療福祉センターのセンター長の挨拶の後、出席施設の自己紹介。続いて、各施設から提案された協議議題について、各施設の取り組みなど意見交換がありました。

協議議題

議題一「一般外来患者の確保について」

議題二「各施設における有期・有目的の入所の利用状況と適用上の問題点について」

議題三「脳血管疾患専従リハビリテーションスタッフによる摂食機能訓練の算定について」

議題四「ストレスチェック制度の導入について」

議題五「大規模災害発生時におけるブロック内の連携協定について」

この五項目について、各施設の取り組み状況や施設の方向性について意見交換がありました。

本会議の施設長・事務長会議は午後一時三十分より、十五施設の施設長、事務長、関係者が出席し開催されました。

定例の報告として、

①午前中に開催された民営部会の報告

②本年度開催された関東甲信越静肢体不自由児施設療育研究部会の報告

③平成二十六年度会計報告及び監査報告

がありました。

続いて協議事項について、意見交換を行ないました。

協議議題

議題一「医療型障害児入所施設の今後の事業展開の方向性について」

議題二「大規模災害発生時におけるブロック内の連携協定について」

議題三「18歳以上の障害児施設入所者への対応について」

議題四「地域と連携した在宅支援策について」

四議題について、各施設の取り組み状況を報告し活発な意見交換が行なわれました。

最後に、次年度の施設長・事務長会議及び療育研究部会の担当施設の挨拶があり、施設長・事務長会議は、稲荷山医療福祉センター主催で、また療育研究部会は当施設の担当で開催の予定です。

会議終了後、一七時三十分より懇親会があり、情報交換を行ないました。

翌十三日（金）は、主催施設の愛正会茨城医療福祉センターの施設見学がありました。

社会福祉法人　愛正会　茨城医療福祉センターは、機能の充実を図るため、旧茨城県立こども福祉医療センターの後継事業者として平成二十六年四月一日から施設運営を引き継ぎ、新たな施設として運営しています。広大な敷地に広々とした新しい施設が印象的でした。

各施設が児童福祉施設としての障害児の総合的な医療・福祉・療育のサービスを提供し、社会が求めるニーズに応えるよう、いろいろな問題についての協議、情報交換を行なう会議でした。今後、各施設が地域に求められる施設に発展することを望みます。

日本重症心身障害福祉協会　東日本施設協議会報告

庶務課長　石井　昌之

平成二十七年十一月五日・六日、東京都港区ホテルアジュール竹芝にて第四十二回日本重症心身障害福祉協会東日本施設協議会が開催されました。

当院からは椎木院長と西藤副院長、佐藤事務局長、八代看護科長、小谷生活支援科長、私が参加しました。プログラムの概略は以下の通りです。

一、特別講演「緩和医療について」

千葉徳州会病院

渡邉　敏緩和ケア内科部長

二、調査研究・報告

三、シンポジウム「重症心身障害児・者の豊かな生涯とターミナル」

①「超・準重症心身障害児・者について」　村田　恵美子保護者

②「高齢化した重症心身障害児・者について」　小畑　恵子東京小児療育病院作業療法科長

③「在宅の重症心身障害児・者について」　鈴木　弘子在宅療育支援センター東部訪問看護事業部長

④「末期を迎えた重症心身障害児・者について」倉田　清子東大和療育センター院長

特別講演では、千葉徳州会病院渡邉緩和ケア部長から「終末期医療総論」、「緩和ケア・医療」、「社会情勢と終末期療養」に取り組んでいる内容が伝えられた。今後、私たち施設でも入所者の高齢化に伴うターミナルケア、終末期医療に取り組むうえで示唆に富んだ講演でした。

シンポジウムでは、最初に村田様から在宅障害児の親の立場でこれまでに様々な医療機関や施設を利用してきて感じた率直な意見が述べられました。特に印象的な言葉として、「病状に応じて様々な施設で医療提供を受けたが、その都度、利用者が生まれてからそれまでの経緯や病状の説明をすることが非常に大変であった。」、これらは医療施設で日常的に行われていることだが、ご家族には様々な意味において負担であったことが分かりました。また私たち医療従事者としては、最初に接する際の応対を考え直す機会になりました。

次に、当院の小畑作業療法科長から、重症心身障害児・者施設における入所者の高齢化による問題点やコミュニケーションの取り方、日常から関わりをもつことの重要性が伝えられました。三番目は鈴木東部訪問看護事業部長より東京都から受託した重症心身障害児（者）訪問事業の概要と二十六年度の事業実績の説明がありました。在宅生活での課題としては、レスパイトの受け入れ先や医療ケアがある児の通所施設等受入先の必要性が挙げられた。最後に倉田東大和療育センター院長より、高齢化が進む各施設が直面する課題の一つとして、末期を迎えた重症心身障害児・者について、症例を含めた説明がありました。今後は「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」を作成する必要性も伝えられました。

本協議会は二日間にわたり、会の趣旨である入所・在宅の重症心身障害児者に対する医療福祉サービスの向上及び施設の直面する課題や将来性について研究・協議する場として有意義な機会となりました。

第四十一回日本重症心身障害学会学術集会を主催して

東京小児療育病院院長　椎木俊秀

第四十一回日本重症心身障害学会学術集会が二〇一五年九月十八日（金）、十九日（土）の二日間、一橋大学一橋講堂で開催されました。今回は学会設立40周年の記念すべき大会でしたが、私が会長を任されたので、学術集会成功に向け職員の皆さんと共に奮闘しました。その結果、プログラムの内容といい運営といい東京小児療育病院らしさが出たと思います。二日間で千名を越す参加がありました。

初日のシンポジウム「重症心身障害への医療的支援の現在・過去・未来」では心身障害児総合医療療育センター長の北住映二先生が重症心身障害の歴史を本当に分かりやすく話してくださりました。先人たちの苦労や努力、知恵も知ることができました。重症心身障害児者の支援に貢献した人として当院の鈴木康之先生、舟橋満寿子先生の名前が何度も出てきて、当院の先輩職員の働きにあらためて敬意の念を抱きました。

その他に生命倫理に関するシンポジウム、看護に関するシンポジウム、虐待に関するシンポジウムを企画しましたが、どれも素晴らしい講演と有意義な討論が行われました。口演やポスターも充実した内容でした。教育講演、ランチョンセミナーも盛会でした。特にシンポジウムは講演だけでなく討論も重視しました。今回の学術集会で重視したことは二つあります。一つは重症心身障害支援について現在を起点に過去を振り返り、未来を展望することでした。全体を俯瞰することによって、何をしてきたのか、今後何をすべきなのかをもう一度考えてみようということでした。

もう一つは重症心身障害の人たちの存在価値を深く考えることでした。そのことなくして適切な支援はできません。さらに人類の将来を考えても、このことは大きな意味を持っていると思います。科学、技術、経済などは生きていく上で欠かせませんが、そこには価値は含まれていません。あくまでも手段です。手段はどのような目的に使うかで、善にも悪にもなるので、科学、技術、経済に携わる人がどのような価値観を持っているかは非常に大きな意味を持ちます。個人の尊厳と多様性の尊重が実現された社会になるためにも重症心身障害の人たちの存在価値を深く検討することが必要だと思います。

学術集会の主催を通して当院においてもさらに学会活動が活発化することを期待しています。

東邦大学看護学部散策 ―五島瑳智子先生の教え―

東邦大学看護学部事務室　小丹恵子

五島瑳智子先生がお亡くなりになり、早いもので六ヶ月が過ぎましたが、いまだに「こんにちは」と大きな声と笑顔で、事務室においでになるのでないかと、期待するときがあります。「こんにちは」を聞きますと、何ともいえない緊張感と笑顔が事務室に広がり、仕事をするのが楽しくなるのです。

五島瑳智子先生は、学生を愛し、学生のもつ潜在能力を引き出す教育を実行され、多くのことを東邦大学看護学部に残してくださいました。その一部を紹介させていただきます。

看護学部は、四年制看護大学の中では、校舎も校庭もとても狭いのですが、教育的な配慮の施された、多くの思いの詰まった、校舎、校庭です。本館の正面玄関を入りますと、東邦看護教育の象徴としてイギリス、ロンドン市の許可を得て作成したナイチンゲール像が、来校されるすべての方々を、温かく包み、何とも言えない気品で迎えてくれるのです。ナイチンゲールがはじめて看護学校を創設した、ロンドンのセント・トーマス病院の、看護教育カリキュラムには解剖学、生理学、化学などのほか、音楽、バイブルを学ぶ時間が設けられていたこと、感染予防を含め医療全体に影響を与えたこと、人間として具えるべき不動のモラルをもって実行する勇敢さなど、東邦看護教育の支柱であると考えられ、ナイチンゲール像を設置されたと伺っています。現在、東邦大学看護学部の特色ある教育としている教養教育は、医療者として、教養を身につけ、感性を磨くことは、将来大いに役立ち、必要であると考えられていました。

他にも、五島先生の熱い想いの詰まった数多くのものがあります。校庭には、国際交流を推進する校花の「花水木」、歴史を大切にし、記録や研究の基本を尊ぶ校樹の「多羅葉」、東邦大学の教育理念「自然・生命・人間」を表した「三本の欅」、一九八七年から中国と東邦大学医療短期大学の交流が開始され、日中交流の記念として、中国の国樹「イチョウの木」、医の倫理の原点として「プラタナス」など校庭にはいろいろな意味が込められた、樹木があります。

五島先生、今年も校庭の紅白の梅が満開で卒業生を見送ってくれます。四月には新入生を「桜」が、五月の戴帽式には「花水木」が学生をお祝し、見守ってくれますね。

校舎、校庭のみならず、教育・研究者との人とのつながりなど、五島先生は多く残してくださいました。先生が築かれた、東邦看護教育への思い、夢を私たち事務職員も見守り続けます。

チャリティーコンサート
オルフェの会

平成二十七年十二月六日（日）グランドプリンスホテル高輪・プリンスルームに於いて社会福祉法人鶴風会後援会主催のチャリティコンサート「オルフェの会～五島瑳智子先生を偲んで～」が開催されました。

第一部では、ご来賓を代表して炭山嘉伸先生（東邦大学理事長）に、ご挨拶を戴きました。また、赤星副院長が当法人の施設活動状況の報告をいたしました。

第二部のコンサートでは、MARIA with エーデルワイスカペレによる、アルプホルンやクーグロッケンなどアルプス地方の民族楽器の演奏や、ヨーロッパの民謡、またオペレッタ「白馬亭にて」からザルツカンマーグートやジギスムントなどを披露していただき、最後に全員で、エーデルワイスおよび毎年恒例となった東日本大震災復興ソングの「花は咲く」を合唱し、盛会裡に終わりました。

平成27年度
チャリティーバザー

昨年十月二十五日（日）に、施設改修等の資金の確保を目的としたチャリティーバザーを開催しました。早い方ですと七月より「毎年これが楽しみなんだ」と大変ありがたいお言葉とともに日程のお問い合わせをいただくチャリティーバザーも、今年で三十九回を数えます。お客様とスタッフで作り上げる会場の賑わいは毎年徐々に大きくなるように思われます。

チャリティーバザーにお越しいただいているお客様の朝は早く、開始時間である十一時の四時間前、朝7時に長蛇の列に並ばれて整理券を取得し一旦解散、十時ごろに会場に戻られます。その時には、道路にあふれるほどの人と熱気に満ち、開催時間を前倒してチャリティーバザーが始まるというのが、毎年恒例となっています。

当日の天候は去年に引き続き快晴となり、同じく去年よりチャリティーバザー（と当日の晴れ）の担当を任命された筆者としては、安堵のため息をついた日となりました。念のため雨避けとして設置したテントは日差し避けの日傘として活躍し、屋上から会場を覗くと、大小色とりどりの傘が風ではためいているようでした。

そのテントをはためかせた風は会場準備の中では幾分か強く吹き、スタッフを少々困らせており、筆者の晴れ男具合には、「晴れ男としては申し分ないが、風が弱点だね！」とお声がけを方々よりいただきました。そんなお言葉をいただきながら、子供は風の子、大人は火の子と申しますし、小児を冠する施設ですので風は味方で、私は大人なので風が苦手は道理かなと言い訳がましい事を思い、自身はずいぶん子供であるなと自省し苦笑いしておりました。その風もチャリティーバザー開始時間にはピタリと止み、お客様が困ることはなく、快適な買い物ができたかと思います。

そんな当日お越しいただいたお客様と、会社・団体等ならびに個人様から多くの御協賛を頂き、前年を大きく上回る二五〇万円の収益となりました。

この収益金は、昨年十月より始まっておりますます病棟一階部分の改修をはじめとした、施設改修等の資金に充てさせていただきます。

経済情勢は依然厳しいといえますが、そのなかにありながら、ご支援賜りました皆々様に深く感謝申し上げます。

社会福祉法人 鶴風会 後援会だより

昭和二十三年卒　河津　緑

鶴風会の活動として、「脳性マヒ児を守る会」があります。武蔵村山市に東京小児療育病院があり、その後、みどり愛育園を開設して重症心身障害児者の短期入所事業、通所事業や児童発達支援等に積極的に取り組んでいます。これは龍先生の慧眼による賜で、守る会の理事の方々も、先生のご指導に協力していて有り難いことでした。私は、出かけた先に守る会の募金箱が備えてあるのを見ると「ここにも」と思い、目頭が熱くなりました。

龍先生は大正十二年の大震災でご主人とお子様を亡くされ、帝国女子医専の一期生になられました。先生は、私の女学校の先輩で校医をされていて、入試や身体検査の時など白衣の女医さんをゾロッと何人も連れてこられました。その時女医さんに憧れた人もいたようです。私は、進路に医学部は念頭になく、ピアノをやっていたので芸大の前身の東京音楽学校を受験する積もりでした。其処は女学校の四年で受験できたので、四年生の時受験しました。十人しか採らないのですから受かる筈もなかったのですが不合格、それでも五年生で、再度受ける積もりだったところ、龍先生に医専を受けたらと勧められ、ピアノに才能が無いのは充分承知だったので自信も無く、切替に問題はありませんでした。丁度戦争が激しくなった頃で、何もしないでいると徴用に取られてしまう時代でしたから、医科志望の人も多く、私が入学した時、私の女学校では帝国女子医専に十二人、東京女子医専（河田町）にも八人入学という状況でした。しかし、入学後結婚したり何かで挫折した人も多く、私が昭和二十三年に卒業したとき、女学校から一緒だった人は三人だけでした。空襲や信州への疎開を経て、東京蒲田の校舎に戻ったのは昭和二十年八月でした。

私は、戦争中（昭和十八年）に女子医専に入学、額田晋校長の講義を聴いて引き込まれてしまいました。大した抱負もなく、言ってみれば平坦な気持ちで入学したのでしたが素晴らしい校長の学校に来たことは感激でした。「努力せよ」と言われた言葉が耳に残って勇気が沸いて、よし！やろう！という気持ちになったことを今も覚えています。

このようにして私の医学生生活が始まり、精神科医となって仕事をしてきました。脳性マヒ児の場合もそうであったように、精神科でも早期発見、早期治療が大事です。一般の方は、知識に不足の場合が多いので、知識を与え、知的水準を向上させ、視野を拡げるように啓蒙することが私たちの仕事です。家族に問題を感じても、表に出さない、出せないで隠しているようなことがなんと多いことか。治る者が治療しないまま無駄に時を過ごしていることが多いのです。折しも清原選手の薬物依存の事がでてきました。これは、警察がいくら見付けても医療に乗せなくては治らないのです。私は九十歳の高齢で臨床を離れているので、古い話しかできませんが、精神病は治るということ。医師、心理士（カウンセラー）による専門的治療に待たねばなりません。それは本人の自覚ということで入院してこそ可能となるのです。清原選手の昔の盟友が「もう少し自分が話していればよかった。」と言っていましたが、彼もよくは分かっていません。テレビで「自分もやっていたが治った」と経験した人が言っていましたが、時間が無くて全部話せなかったようでした。入院してのことでしょう。良い薬もありますし、良い治療者と良い病院が必要なのです。

清原選手も今の困難を乗り越え、健康になって社会の中で良い仕事をして頂きたいと期待しています。

法人ホームページリニューアルのお知らせ

このたび、法人のホームページを、「見やすく使いやすい」をコンセプトに全面リニューアルいたしました。
今後もこのコンセプトに基づき、内容の充実・改善を図ってまいります。

https://www.kakufuh.com

鶴風会後援会へご寄付者ご芳名

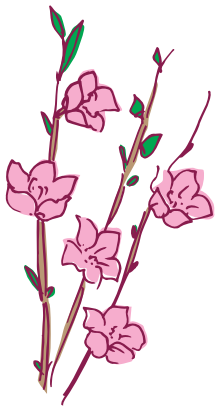
平成27年7月～平成27年12月
180名（五十音順・敬称略）

青木　悦・青木りう子・朝川　孝幸
足高　毅・東　恵子・阿部　正和
安士　達夫・安部　浩一・飯田美保子
井澤　正博・石川　至・石田　哲朗
泉水　昇・伊藤　文子・伊藤　元博
稲垣　登稔・猪俣賢一郎・上野　洋子
内野　正文・海野　俊雄・梅田みほ子
梅田　嘉明・大関　忍・大高　究
大塚　慶子・大山　みつ・忍足美代子
小原　桂子・小原　明・忍田　拓哉
鹿島田忠史・柁原　宏久・金森　勝士
金山　明子・金子クニ子・金親　正敏
鎌田　郁子・鎌田　直子・加藤　葉子
釜范　登志・菅野　壽子・金森　勝士
木山　博夫・木村　裕・久保　初美
倉根　理一・黒木　貴夫・黒瀬　嘉幸
月花　亮・小泉　一介・神山　悠子
後藤加寿美・小林　寅喆・小林　一雄
小林登喜子・齋藤　洋子・先山　隆司
佐々木徹郎・佐地　勉・佐多　由紀
佐藤　中・佐藤　和子・佐藤　重雄
澤井　寛人・三登　和代・佐々木裕美
佐藤　麗子・斎藤　則善・澤田　利匡
設楽　誠・志鳥眞理子・柴　昌徳
柴田　勝・渋谷　和俊・島田　敏雄
島田　長人・嶋田　寛子・島津和貴男
島野　光・獅山富美子・首藤さち子
菅野　訓子・洲鎌久美子・杉　薫
杉内　愛・杉本　寛子・杉本　光以
鈴木カツ子・炭山　朋子・炭山　嘉伸
須田百合子・鈴木　秀明・芹澤　滋幹
高木　芳夫・高月　誠・高槻　義夫
高安　勤・武田　朋子・田部　秀山
竹川　恵・髙橋比路美・塚本　安子
月本　一郎・月本　伸子・辻本公美子
堤　俊一郎・戸倉　夏木・苗村　みえ
中野　重徳・中村　豊・並木　温
中村志津子・中谷　尚登・長岡　貞雄
西井　華子・西宮　常代・二瓶　浩一
根本　勤・能谷　正雄・野口ケイ子
野口　隆敏・延島　幸子・野中　杏栄
野中　博子・野村　直子・橋口　玲子
蜂矢　正彦・蜂矢百合子・早川　浩市
林　保夫・林　佳子・早原　千鶴
原　まどか・原田裕美子・原山　国秀
原田千鶴子・樋口志津子・平田　徹
蛭田　啓之・福田　健・土方　淳
平野敬八郎・藤井　昭夫・星田　宏
馬嶋　順子・松原　龍弘・松原　美保
松本　章・松本　英亜・松本　誓子
松山　潤一・丸山　和子・水野　惇子
水吉　秀男・三宅　三・宮崎　元伸
向山　徳子・向山　秀樹・向山　和代
村川　公一・森　克彦・森　紘子
盛川　温子・森澤　豊・矢野　春雄
山川ふみ子・山口　美穂・山下　香澄
山田　智政・山村　憲・山本　温子
湯澤　俊・横澤　禎二・吉田　宏重
吉田　友英・吉見　梓
㈱インターメディカ
エームサービス㈱
桜蔭学園　生徒会・星総合病院

社会福祉法人鶴風会へご寄付者ご芳名（法人・団体・個人）

平成27年7月～平成27年12月
33名（五十音順・敬称略）

赤星　恵子・東　八重子・阿部美代子
大場　幸延・岡松　眞幸・小川　房子
加藤奈津子・上岡　謙夫・上岡　正子
西藤　武美・佐藤　清子・澤村　愛
鈴木　康之・高橋　孝彦・田中　淳子
鶴岡　広・西村　茂里・畠山　政信
父母の会・堀越　徳浩・守田　洋
八代　博子・山崎あけみ・山田耕一郎
山谷　敏男・吉川　芳登・吉永　克己
竹中　幸宏
あゆみ保険事務所　杉林　勤
都立あきる野学園　北原ゆかり
東京小児療育病院・みどり愛育園父母の会
社会福祉法人　鶴風会後援会



編集後記

桜も開花し、あたたかくなり、春が訪れました。

東京小児療育病院でも病棟改修工事の終わり、ピカピカになった東1病棟の庭でシダレザクラ（五十周年記念樹）の花が、ゆっくりと開いてきました。

広報誌「はぐくむ」を三十二号よりカラーページを増やしての発行といたしました。また、発行月を四月と十月の年2回とさせていただきました。

今後ともよろしく願いいたします。

編集委員会